

シベリア帰りの亡き父を偲び

北海道 菅 昌俊

大正十四年樺太庁大泊警察署を振り出しに管内駐在所を転勤し、昭和十六年から大泊警察署水上署勤務となった亡父（平蔵）と終戦を大泊町で迎えました。

当時、父は稚泊連絡船の移動警察として外国人移動者の取締りに当たり、三日置きに稚内に出張していたが、敗戦の色濃くなるに従い浮遊機雷や敵潜水艦の出没が多くなり魚雷の発射を回避して航行という危険な状態で、その都度、水盃で安全を祈ったことが浮かんで来ます。

また、非常召集で大泊飛行場の外人労働者の暴動鎮圧や輸送船が撃沈され海岸に続々と漂流してくる日本軍人を茶毘に附した悲惨な状況を当時中学生だった私に聞かせてくれたことを思い起こします。

昭和二十年八月十五日終戦の詔勅を父は大泊警察署で、私は卒業後、特別幹部候補生として入校の待機通知

を受けておりましたが、新設された陸軍糧秣廠大泊出張所軍属として採用され勤務していたので、鈴木中尉以下職員と同所で聞きました。

必勝の信念に燃え軍務に励んでいた者として、そのショックは大きく皆で号泣しました。本廠からの司令で直ちに機密書類等を焼却し一時帰宅すると、本籍地の長浜村に居住していた叔父が召集令状と奉公袋を持って入隊すべく立寄ったところでした。入隊するといつてきかない叔父を説得し家族の元に帰したのですが、肝心の父が自宅に戻らず、港湾の取締りに当たる警察官として一倍責任感の強い父は、我が家のことをかえり見えず引揚業務に専念し、十八日になって一時帰宅すると、今夜の引揚船に母、祖母、妹三人リック一つで乗船するように指示して別れました。幸い大泊に居住していたので母達は無事北海道に渡れました。

当時、十七歳の私は母達の乗船を確認し、その後、各地より集結する婦女子の乗船を手伝ったが、押されて海中に転落する者もあり惨憺たる状況にあった。

大泊女学校に収容される父と別れた私は、日々状況が

変わってくるのを見、長浜村の叔父を尋ね脱出の計画をねっていたところ、幸運にも今夜密航船が出るから乗せてやる、但し、命は保障出来ないと言われ喜んで悪天候の深夜小型船に乗船した。途中、海峡が荒れ積荷を投棄し船底にへばりつきながら無事稚内に上陸出来ました。

父は、その後、北樺太のオハに抑留され、更にソ連の炭鉱に移動、厳寒のシベリアで労働に従事した。帰国命令が出てナホトカまで来るが、帝国日本の番犬とアクチブに摘発され、連れ戻されて労働に従事。昭和二四年十二月最終船で帰国しました。

駅に迎えた父は水腫れとなり、雑糞にカビの生えた黒パン一個記念に持って来ました。帰国の日、小五年の妹が伝染病で隔離病舎に入院していたため、自宅のバラック兵舎に立寄り、そのまま付添のため病舎に入りました。病舎の寝台でシベリアの苦勞話し、引揚後の様子等を寝ないで話し合ったことを昨日のように思い出されます。

特に厳寒のシベリヤで同僚刑事が魚カスを食べ糞詰まりして肛門から針金で取り出してやり泣いて感謝された

こと。その刑事も帰国出来ず凍上に葬って来たこと。引揚後、ミミズの入った臭い澱粉カスや燕麦を食べて生き延びたこと等、苦勞の数々を思い起こすと感無量です。

私は、引揚後、天塩町で農業を手伝い、同年美瑛町役場に採用され勤務していたので、幸い父も帰国後役場、森林組合に就職し、その後、民生委員として十五年間その他公職を務めました。特に外地引揚者のため役員として奔走しておりました。

昭和五十二年NHKの桂小金治さん司会の「それは秘密です」に、父が樺太落帆駐在所に勤務していたとき、落帆川という深い急流に六歳の子供が橋から転落し、漁師も探せずあきらめていたところへ、父が官服のまま飛び込み救助したことがありましたが、その子供が成人し横浜に居住、当時の命の恩人を探し、東京のスタジオで再会した感動の場面を全国放送されましたが、とにかく責任感の強い他人の面倒を良くみたと父であったと思います。

五十年に母が、五十三年に父がガンに侵されこの世を去りました。

戦後四十五年、復興した日本で私共が幸せな日々を送ることが出来ますのも、国のために殉じた同胞の加護によるものであり、感謝し、今後、過ちのない永遠の平和を祈念するものです。

私の人生体験

北海道 白川 ハギ

初めに今までのことを振り返って見ますと色々の体験がありました。もっとも大きかったことは樺太での敗戦でした。このありさまを私の子供や親戚孫友人等に残しておきたいと思っておりましたが、どうすればよいか分からないまま歳月は過ぎてゆき、私もだんだん年を取ってくるので一つ一つを思い出して書いてみましたが、なにせ遠い昔のことです。又無学なため大変読みづらと思います。

私は明治四十二年六月三十日利尻鬼脇に生まれ、おじいさん伯父さん夫婦おじさん四人おばさん一人父母の大

家族の家に生まれ大変幸せであったそうです。

明治四十三年に樺太に皆で移り暮らしそうです。父は馬が好きで馬の仕事をしておりました。冬は出稼ぎに歩き家族を引きつれ私も一年生のときには学校を三回も転校し字を覚えることが出来ませんでした。真岡郡蘭泊村富内岸沢にて六年生の頃はとても健康で走ることが好きでよく選手として真岡の学校へ行って走ったものでした。六年生を卒業して蘭泊寺町に暮らししました。人様のごはんをたべなければ一人前の人になれないということで庁立真岡病院に奉公に出されました。仕事は入院患者の食事を作る所でした。それは大正十二年九月一日関東大震災があったときでした。

私が十六歳のとき家が忙しくなったので家にかえり家の仕事を手伝ったのです。

家には常時人夫を三人ぐらいますが使っておりました。おじいさんの友人で福井さんのお世話で瀧端松治がこられました。大変真面目な人でしたので父母はとても気に入りました。

父は昔の人のため学問はなく、無学のため、仕事上の